

鑑賞教育を考える

美術教育専修 野村幸弘

1

12年目研修をはじめてから、今年で4回目。

感じもつかめてきたし、報告書も2本書いた。

なので、今回、研修に来られるYさんには、これまでどんな研修をしてきたかを知ってもらうため、事前にその報告書を読んだ感想を書いてもらおうと考えた。

今年からようやく本格的に活用し始めたAIMS-Gifuに報告書をアップして、Yさんに連絡し、その課題を出すと、数日して返信がきた。

鑑賞教育という言葉は、なんだか難しく響きます。読ませていただいたような美術品を解析する鑑賞というのは、知的で楽しいけれど、ちょっと頭でっかちな楽しみ方のように、私は残念ながら苦手です。この講座でやっていけるかなあ、というのが正直な気持ち、なんて書いていいのでしょうか。ただ、私自身は鑑賞って楽しいことだと思っています。まだ美術が好きというだけで授業をしていた十年も前、音楽を聴いて、最初に思うのは好きか嫌いかなんだし、美術も一緒じゃだめかなと思って、小学生にピカソの「泣く女」を見せました。そうしたら、なんかヘンとか、お化け〜とか、にぎやかに騒いだ末に、「この人くやしそう」って出てきたんです。「むちゃくちゃないとる」とかも。最後に目玉一つの泣く女を出したらクラス中がシンとして。指導案も何もない、価値付けや評価に結びつけることのできない授業だったけれど忘れられなくて。でもそれ以上できなくてホコリをかぶっていた私の鑑賞教育。『造形遊び』のように『鑑賞遊び』ってどうでしょう。30日は、おっかなびっくり教室にお邪魔させていただきます。

このようなYさんの反応は、まったく予想していなかったので、わたしは次のような返事を書いた。

今回、初めて「宿題」を課してみたわけですが、まだじっさいにお会いする前に、「宿題」は出さなかったほうがよかったのかもしれない。ちょっと反省してます。AIMS-Gifuの「コース文書」に入れた報告書は、研修の結果が書いてあるので、いきなり結果を読んでもらうことになってしまって、それでちょっと面食らってしまわれたかも…。先に結果を知ってもらったほうが効率がいいと早合点してしまいました。そんなに焦る必要はありませんよね。それと研修に対する先入観を与えてしまったことも反省。そんなことを感想文を読みながら思いました。そこで、もういちど仕切り直し。読んだ報告書の内容は忘れて下さい、と

いうわけにも行きませんが、でも研修の初日は報告書のことはひとまず脇において、まずはYさんのこれまでの授業経験などのお話をじっくり聞くことから始めたいと思います。なので、どうか手ぶらで、気楽にいらして下さい。お待ちしております。

慣れる、ということは、ある意味、効率がよくていいことだが、同時に弊害もある。なにより新鮮な気持ちが失われる。そうするとファースト・コンタクトの緊張感や、出会いの意味がどうしても薄れてしまう。

振り返ると、これまで研修に来られた先生がたの多くは、中学校の美術の先生だった。今回は小学校の先生がひとり。当たり前のことだが、来られる先生は毎回同じではない。だから、研修に来られる先生ひとりひとりに個別の対応をすべきである。これは大変なことかもしれないが、しかし、研修や教育というのは、結局のところ、ひとりひとりの人間に向き合うということではか成立しえないのだろう。

2

Yさんは、岐阜大学教育学部美術教育科の出身。卒業論文で扱ったテーマは、「造形遊び」。卒業後、中学校2つと、小学校3つの職場を経験、あいだに産休、育休を数年取り、この春から復帰して現在4つめの小学校の教諭である。

平成10（1998）年に学習指導要領が改正され、鑑賞教育が重視されるようになる以前の平成7（1995）年に、2つめに赴任した中学校で、Yさんはすでに鑑賞教育の授業を行っていたという。まだ周囲に鑑賞教育への理解者がほとんどいない中での実践だったようだ。

小学校の高学年から中学校にかけて、楽しかったはずの図画工作、美術が、徐々にきらいになる。これは美術教育最大の悩みであり、それを経験しない教員はいないと言っていい。中学1年生にアンケートを取ると、年度によっては、美術がきらい、という生徒は9割にもものぼったとYさんは言う。その理由を、Yさんは「絵が下手だという意識にしばられているから」と考えた。そんな状況を変えようと、作るのが苦手で美術がきらい、という生徒にとって、美術は楽しいものだ、ということを感じてもらうために始めたのが、鑑賞の授業だった。先ほどの感想文にもあるように、「鑑賞って楽しい」というのが、Yさんの信条なのだ。

それでは、じっさいYさんは、いったいどんな鑑賞の授業を行っていたのか。

平成7年の研究授業で実践するさいに、Yさんが作成した学習指導案から紹介しよう。

Yさんは、中学1年生の7クラス（1クラス約30人）に対して、年4回の鑑賞授業を次のように組んでいる。年間を通したテーマは、「楽しく見よう」である。

- 第1回 パブロ・ピカソ～人間を描く～
- 第2回 ヴァン・ゴッホ～自分を描く～
- 第3回 マルク・シャガール～宝物を描く～
- 第4回 俵屋宗達と尾形光琳～空間を描く～

第1回目は、生徒たちの「美術ギライ」の解消を目指して、ピカソの《泣く女》を題材にし、

写実表現ではなく、その自由な表現方法を鑑賞、第2回目はゴッホの人物画（《自画像》）と風景画（《星月夜》）を見せた。Yさんが示した指導案は、第3回目のものである。

題材は「マルク・シャガール」。授業のねらいは、「作品を楽しく鑑賞することによって、芸術を身近に感じること」、「シャガールの作品に触れ、その表現の特徴をつかむこと」。

Yさんがシャガールを題材に選んだ理由を、「生徒は写実的な作品が良い作品であると思っており、そのほかの表現は、わけのわからないもの、で片付け、その表現を楽しもうとしない」からだとしている。これは、「絵が下手」、つまり「写実的に巧く描けない」生徒たちへのエール、励まし、の意味をもつのだろう。シャガールの絵を見れば、絵というのは、表現したいと思ったことを自由に表現できる、何をどう表現してもいい、ということが分かる。端的にいうと、これがYさんの生徒たちへのメッセージである。授業では、岐阜県美術館提供のハイビジョンでシャガールの作品を見ながら、シャガールの絵の特徴を理解して行き、その結果、生徒たちからの積極的、意欲的な反応が感想文のかたちで出てくることになった。Yさんは生徒たちの反応に十分な手応えを感じたらしく、「この授業が生徒たちに強い印象を与え、美術に対する興味や関心を高めたことを確認できた」と書いている。

このあと第4回目で、俵屋宗達と尾形光琳の《風神・雷神》を取り上げ、日本美術にはもっと自由奔放な表現があることを示そうとしたのだという。この題材は、今回の研修でさらにブラッシュ・アップし、数年ぶりに鑑賞授業の実践の中でふたたび取り組むことになった。

ほかの多くの図画・工作、美術の先生とちがって、Yさんは早くから鑑賞の授業に取り組んできた。しかし、その先駆的な試みは、校長や学年主任の無理解、問題行動を取る生徒たちのいる困難なクラス運営などの壁に阻まれながら、かならずしも納得の行く展開ができずにいた。Yさんの鑑賞の授業をいわば「蔵出し」して、ホコ리를払い、さらに磨きをかけて、もういちど目の見させることが、今回の研修の意義だとわたしは考えた。そこでYさんの勤務校でじっさいに鑑賞の授業を行うことを想定した指導案を作成する、という課題を出すことにした。そのさい、かならず2つの美術作品を比較することを条件としたのである。

3

8月の夏休みのあいだ、岐阜大学の図書館、岐阜県美術館などでの自主的研修を経て、Yさんは研修最終日に、済ませた課題をもってわたしの研究室にふたたび現れた。

手にしていたのは、「M小学校第3学年図画工作学習指導案」。題材名は、「どっちが天才!？」。宗達と光琳の《風神・雷神》を比較するという内容だ。この指導案のなかで、Yさんはこう書いている。

たかが数枚の絵を見るだけに1時間かけて、と簡単に考えないでほしい。ただ見せるだけではだめなのだ。教師は子どもたちと作品の出会いを演出しなければならない。シナリオ通り、作品を目にして子どもの表情が変わったら、その授業は大成功。（中略）子どもたちを自分の世界に取り込んで、孫に茶道具自慢をするご隠居よろしく、作品について語るだけである。これが鑑賞の授業をする醍醐味だ。

作品というのは、もちろん「見る」ものではあるが、たんに見るだけではない。むしろ「出会う」ものである。それが「鑑賞」だとわたしは思う。Yさんは、その点をきっちり認識しているだけでなく、その「出会い」を演出することが教師の役割だと書いている。授業の目的と教師の役割が明確なら、あとは実践に立ち会うだけ、とわたしは判断し、12年目研修で初めて、研修者の勤務校へ授業を見に行くことに決めた。

2007年11月21日、M小学校3年1組でその授業は行われた。

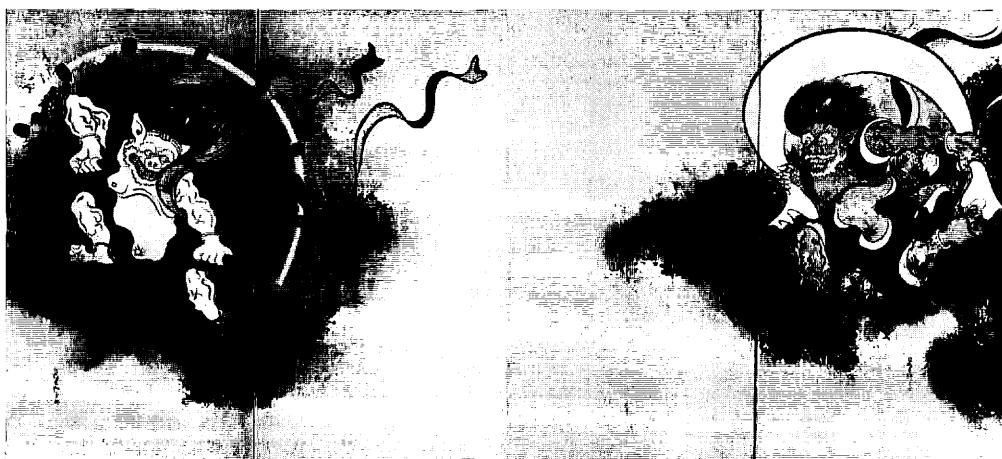
Yさんは教室に入るやいなや、「今日は絵は描きませんよ～、絵を見るんですよ～」と生徒たちに話し始めた。そして宗達と光琳の《風神・雷神》を大きくカラーコピーした紙を、黒板に貼った。すると生徒たちは、訊きもしないのに、「あ、見たことある!」「そっくりだよね～。」「ヘンな生き物～。」「鬼だ!」と感想を口にした。すばやい反応である。Yさんも、授業後のレポートにこう書いている。

黒板をほとんどいっぱい使って2枚の風神・雷神図を貼ったとたん、子どもたちの口から様々な感想や発見があふれでてきました。もうこっちの物だと、そのとき思いました。かなり鋭い意見もあってドキドキしたほどです。

俵屋宗達



尾形光琳



Yさんは、宗達と光琳を江戸時代の天才絵師と紹介し、絵の題名が《風神・雷神》であることを明かしたあと、どちらの絵が好きか、好きなほうに自分のネームプレートを貼るよう指示を出した。黒板に掲示された絵の前まで行き、すぐに好きな絵を決める生徒、長いあいだ逡巡する生徒、友だちの様子をうかがう生徒など、さまざまである。結果は、ほぼ半数ずつ。しかし、ネームプレートを張り替えてもいい、と再考をうながすと、宗達のほうがふえていった。

次にYさんは、生徒たちに宗達と光琳の絵のちがいについて、気がついたことを発言させた。

「光琳の風神・雷神は、宗達と比べると小さい」

「光琳のほうが色があざやか」

「宗達のほうが昔っばい」

「宗達には雷神の上に雲がある」

どれも的確な意見だし、観察も細かい。絵は、比較すると、さまざまな言葉を誘発するのだ。

ひと通り生徒たちの意見を聞くと、Yさんは彼女独自の「宗達光琳物語」を語り始めた。今までざわついていた生徒たちがYさんの物語に引き込まれ、固唾を呑んで聞き入っているのが、とても印象的だった。

宗達を尊敬していた光琳は、宗達の《風神・雷神》を懸命に模写した。しかしどうしても原作を乗り越えることができない。とくに風神と雷神のあいだに生じる空間、これを宗達のようにうまく表現できない。そう感じた光琳はその空間を流れる川に変えた。そして風神と雷神をそれぞれ紅梅と白梅に変えた。その結果、完成したのが、光琳の有名な《紅白梅図屏風》だった……。

そういう架空の物語を語って聞かせたのだ。

Yさんは、レポートにそのときの感想を書いている。

終盤、まとめにかえて、自作の光琳物語を語りきかせました。子どもたちが大好きな「お話」仕立てにしたことで、真剣に聞いてくれたのもなかなかよい手応えでした。

絵を見ながら、それを自由に解釈したり、そこから物語を作り上げていくことは、鑑賞の非常にいい入り口だと思う。とくに小学校低学年では有効だと思うし、それはじっさいの授業の中でも確認できた。しかしこれは発達段階にあわせて、できるだけ史実に近い説明や、より客観的な解釈にしていく必要はあるだろう。

生徒たちの意見、感想などを言わせたあと、そこで出されなかったこと、あるいは生徒たちが気づかなかったことを授業者が指摘することは、鑑賞の授業で重要である。そのさい、絵の細部の比較が非常に効果的である。たとえば、風神、雷神のそれぞれの顔だけをクローズアップして比較してみるのである。そうすると、宗達と光琳では、黒目の位置が異なっていることがはっきりと分かる。つまり視線の方向がちがうのだ。光琳はかなり忠実に宗達を模写しているのだが、よく見ると、ところどころ異なっている。筋肉のつけ方なども、光琳は宗達より強調して表現している。それは、もちろん意図な改変であることはまちがいない。全体を見て分かることも当然だが、鑑賞の魅力は、作品の細部にまで分け入って、くわしく見ることにある。クローズアップ

の比較が力を発揮する理由である。

また、ある芸術家の作品を取り上げるばかり、時間的な制約はあるにしても、できるだけ多くの作品を見せたほうがいいだろう。今回の授業の場合、光琳の《風神・雷神》だけではなく、《紅白梅図屏風》と関連させた授業の展開はよかったので、さらに《燕子花図屏風》(根津美術館)、《ハツ橋図屏風》(メトロポリタン美術館)、《草花図屏風》(根津美術館)、《松島図屏風》(ボストン美術館)なども最後に見せるといいと思う。たくさん見せると、印象が薄まる、混乱する、授業のポイントがぼやけるなど、マイナス面も考えられるが、逆にまとめて見ることで、ひとりの芸術家の個性がはっきり理解できるという大きなメリットもある。比較して見る方法がすぐれているのも、結局、見る作品数がいっきよに2倍になるからである。数をこなすことも鑑賞にとっては重要な点なのだ。そのためには、まず授業者自身ができるだけ多くの作品を見る必要がある。

授業案を作ることに、さほど困難はありませんでした。「2枚の絵を比較する事で授業を作る」という課題は、大変合理的で興味をそそるものだったからです。ただし、何を選ぶかで、こちらのレベルや手の内をすっかり見通されるような課題です。なんだか、負けないぞ、という気持ちが沸いてきて、題材を決めるのにめいっぱい時間を割くことになりました。それこそ、モナリザから現代アートまで、美術館、図書館のはしごをしました。久しぶりにたくさんの絵を見られて、楽しかったです。大嫌いなダリまで見て、結局、自分の一番好きな日本画にしようと考えてからは、さくさくと授業作りが進みました。

こうYさんが書いているように、鑑賞の授業を行うには、たくさんの作品を見るのがすべての出発点である。いや、できれば、作品は「見る」だけでなく、「出会う」ことだ。「出会う」ためには、こちらから出掛けなければならない。鑑賞とは、作品と出会う経験であり、その授業は作品との出会いを組織することなのだ。

